

公共事業が日本を救う【2】

京都大学大学院教授
藤井 聡



過去15年間に公共事業関係 事業費は3分の1に縮減

「コンクリートから人へ」なるスローガンがどれだけ横行しようとも、私たちは今「コンクリート」に囲まれて生きている。世界中の国々が激しい競争の中で高度な効率化を追求し、コンクリートに基づいた社会を築きあげていったのが現代という時代だ。わが国も高度成長期以降、多くのコンクリート構造物を造った。その甲斐あって世界第

2位の経済大国に躍り出ることができた訳だが、今から思えばあの頃に新幹線や高速道路、港や空港といった基礎インフラを整備していなければ今の日本の繁栄がなかったであろうことは少し考えれば誰にとっても明らかだろう。

しかし、このインフラについて多くの国民が十分に理解していない重大な事実がある。それは、コンクリート

その多くが寿命に達するの
が1960年に50年を足した
「2010年頃」。つまり、普
段使っている橋の数多くが、
今まさにいつ落ちてもおかし
くないくらいに急激に老朽化
しつつあるのである。実際、
老朽化のために通れなくなっ
ている橋は全国で約1000
橋にものぼり、その内のいく
つかが実際に「落ちて」いる。
にもかかわらずわが国は
今、公共事業費の削減のため
に「橋の点検」すら十分にでき
なくなっている。特に、予算の
厳しい市町村ではほとんど点
検ができず、彼らが管理する
15以上の約13万橋のうちの
「約7割」もが未点検なのだ。
同じような問題は港や堤防
や水道管などにも当てはま
る。つい先日でも大阪市で老朽
化した水道管が破裂し、何百
坪にもわたって水浸しになる

事故が起こっている。
実は、こうした「深刻な状
況」を既に経験し克服してき
た国がある。米国だ。
図に示したように、米国は
大量の橋を1930年代頃に
造りはじめ、それから50年経
過した「1980年代」頃に
その老朽化が激しくなった。
そしてシルバー橋やマイアナ
ス橋といった大規模な橋梁が
落ち、多くの人命が失われた。
当時それは大きな社会問題と
なり、それを扱った書籍「荒
廃するアメリカ」がベストセ
ラーとなった。米国はこうし
た世論を背景にガソリン税を
2倍以上に引き上げ、インフ
ラの維持・更新に徹底的に取
り組んだ。そしてその甲斐あ
って彼らのインフラはどうに
か持ちこたえ、今の繁栄を維
持することに成功したのであ
る。

橋が落ち水道管が破裂 近づく「近代文明の荒廃」

果たして日本は米国と同様に「近代文明の荒廃」を避けることができるのだろうか？
専門家として断言しよう。

過去15年にわたって公共事業関係費を3分の1程度にまで削減するほどにインフラを

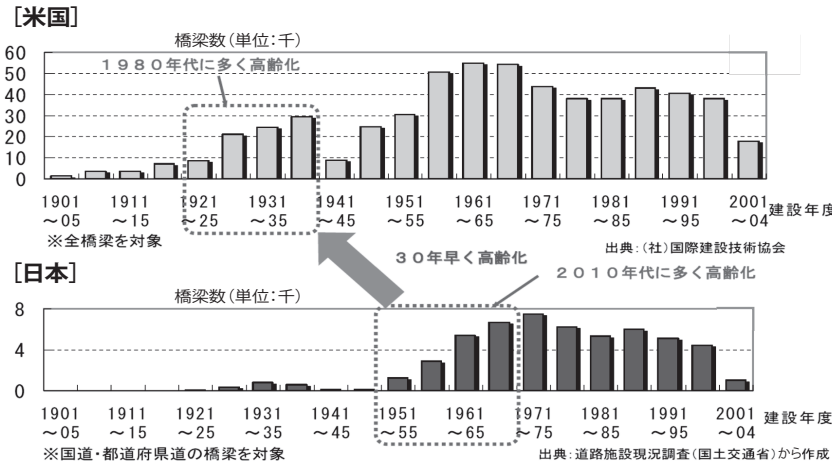
ないがしろにし続けてきたわが国に、近代文明の荒廃を食い止めることなど「絶対に不可能」だ。あちこちで橋が落ち水道管が破裂し、これまで

通りの経済活動と普通の国民生活が営めなくなる近未来がそこまで近づいているのだ。しかしそれは無論、「今のままでは」という条件付きの見込みである。

もし、われわれがこれまで
の愚策を真摯に「反省し、か
つ、歴史が始まって以来はじ
めて迎える」としている「文明
荒廃の危機」を直視すること
ができるなら、かつて米国が
そうしたように、われわれも
また最悪の事態を食い止める
ことは可能であるに違いない。
そもそも、そのための基礎
技術を技術立国日本は十二分
に携えている。今足らないも
のは「インフラ大更新に向け
た政治決断」だけなのだ。

そうである以上筆者は、そ
んな政治決断が一日も早くな
される事を祈念せずにはおれ
ないのである。

日本と米国の橋梁建設数の推移



でできた構造物には寿命があり50〜60年ほどで「老朽化」し、そのまま放置すれば「壊れて」しまうという事実である。
日本のコンクリート構造物の多くは高度成長期につくられた。例えば、図は「橋」が造られた時期を示したもののだが、ご覧のようにわが国では1960年前後から急激に大量の橋が造られた。